

ディープなアメリカ村

(大阪有線特番「アメリカ村ヒストリー」1997年 資料)

世界と共振するアメリカ村

新しい息吹が集まるまち

百花繚乱

- 音楽
- カフェ
- ファッション
- ショップ/レストラン
- アート
- その他

【周防町北側】

LOOP

1969年に日限萬里子のご主人とオープンした喫茶店(～1976年)。当時の炭屋町(現 西心齋橋)は木材加工業の倉庫街で、ループは手作りのインテリアで飾られた小さな喫茶店だったが、アメリカ村を形成する起点のひとつとなった。アメリカ村という名前のない頃に、いろいろな遊び人が集まった。近くにあった石津謙介のVANのアイビー社員たちや、その関係のデザインやアパレル関係のお客さんはビューティフル組と言われ、波乗りの帰りに泥だらけのサーファー組と対照的だった。またヒッピーのような音楽関係もいて、ピースマークと銚子のジープが似合うカフェだったそう。アルバイト店員の中には間寛平がいて、吉本興業には日限萬里子の紹介で入った。常連客は、上田正樹(ミュージシャン)、黒田征太郎(イラストレーター)、テリー篠原(サーファー)、マーキー谷口(DJ)、白藤文二(音楽評論家、元レコード大賞審査員、ラジオ関西『電話リクエスト』DJ)など、有名人多数。ローリング・ストーンズの来日公演時には、「ループご一行様」で観光バスをチャーターまでしたが、コンサートは中止になった。ご主人の作るチーズケーキがおいしかったそう。

★よくかかっていた曲
ドアーズ/Light My Fire、フェイスズ/Ooh La La、Cindy Incidentally、サンタナ/Black Magic Woman、ホワイトバード/it's a beautiful day、ジョン・レノン/Give Peace a Chance、キャロル・キング/You've Got a Friend、シカゴ/If You Leave Me Now、ジャクソン・ブラウン/The Load-Out～Stay、など。

ROCK MAGAZINE

1976年、阿木譲が創刊し、創刊時と1981～1982年頃、事務所がアメリカ村にあった音楽雑誌。海外のニュー・ウェーブ～オルターナティブ音楽の最先端を日本に広めた。※ポップ・グループ、スロッシング・グリッスル、ジョイ・ディヴィジョン、オムニバス「No New York」などクラフトワーク/The Man-Machine(1978)のディスクレビューで、「テクノポップ」という造語を初めて使ったことが有名。ブライアン・イーノのロキシー・ミュージック以降の活躍を広めたのもこの雑誌。表紙を担当したアーティストは、合田佐和子(状況劇場や天井桟敷の宣伝・舞台美術)、鋤田正義(デヴィッド・ボウイ「Heroes」のジャケット写真)、アヒム・デュホウ(ラ・デュッセルドルのロゴ制作)など。1978年、日本初のインディーズ・レーベル「ヴァニティ・レコード」を設立。アーン・サリー(Phewが在籍)、ダダ(P-Modelと至福団の小西健司が在籍)、R.N.A. オーガニズム(佐藤薫が在籍)のアルバムをリリース。

KBS京都のテレビ番組「ポップス・イン・ピクチャー」でコーナーを担当し、当時お目にかかれなかった海外アーティストのプロモーション・ビデオ(フィルム)を紹介。ディーヴォやフライング・リザーズ、ピーター・ガブリエル在籍時のジェネシスなどのレア映像がテレビで観れた。

アメリカ村では、南中学裏の喫茶店『ドムス』で定期的にレコード・コンサートを実施。アナログレコードをかけて阿木譲が評論していた。

パームスでは、いろいろなイベントを実施。

1981年には地下のクラブで、2ヶ月間にわたるヨーロッパ取材のレポートを報告。ドイツ、ベルギー、フランス、イギリスの最新音楽と注目のアーティストのインタビューをビデオで紹介した。特にノイエ・ドイッチェ・ヴェレと言われるドイツのニュー・ウェーブがとんがった音楽ファンに注目された。

※D.A.F.、ディ・クルップス、デア・プラン、SYPHなど

FABMAB

1982年頃にオープンしたカフェバー。

パームスのトロピカル・デコとは対照的に、テクノでクールな内装が人気になった。YMOのメンバーも来店。

世の中、MTVなどでのオンエアでプロモーション・ビデオが全盛となり、お店では盛んに最新のプロモが流されていた。

一般的なカフェバーでは、シャーデーのようなスタイリッシュな音楽が人気だったが、ファブマブでは、ニュー・ウェーブ～オルタナティブな音楽が主流。

ロック・マガジンの阿木譲がよく来店していた影響。

この店の閉店後、同じ場所にオープンした居酒屋の店長はデューク更家。

その後の店は、ジャズの「クルセママ」。

★よく流れていたプロモーション・ビデオ
(ゴドレイ&クレームものなど)

BAOBAB

1983年にオープンしたレンタル・レコード店。

徐々に輸入盤に移行し、ザイル(現コンゴ)などのアフリカン・ミュージックに強い。

パパ・ウエンバとも親交がある。

★代表的なザイルのアルバム

- ・パパ・ウエンバ / リボンザ・アナレンゴ

EPP-02

- ・エメネヤ・ケステール&ヴィクトリア・エレイソンを1991年に招聘
- ・ピリピリ

<http://home.att.ne.jp/lemon/baobab/>

GALLERY [vju:]

画廊的なスナップさはなく、若手の小作品を気軽に観れるギャラリー。

ARTカレンダーに作品が取り上げられた若手は、森村泰昌、田中容子、松井智恵など、現在、大阪を代表するアーティストに。

無印良品

1983年10月オープン。

ホテル日航とともに、アメリカ村に全国ブランドがやってきたと話題になる。

チェッカーズの総合プロデューサーも手がけていたスーパー・エディターの秋山道男がプロデューサー。

糸井重里が書いた西武百貨店の「不思議、大好き。」(1982)、「おいしい生活」(1983)に象徴されるセゾン・バブルの大阪攻略作戦と受け止められたショップ。

かつてアメリカ村で遊んでいた若者が、ニュー・ファミリー化し、家族とともに無印に戻ってくる現象がよく見られた。

西友出身の当時の店長は、冷静にアメリカ村の重要性を分析。
その後も、西友のキーとなるショップなどの立ち上げやてこ入れに奔走していた。

666

1983年オープンのパンクファッション/レザージャケット専門店。
オフマスク00のギタリスト、松尾英治が勤めていた。
ロンドンを中心に、イギリスから直接買い付けた服やアクセサリを販売。
エアー・ウェアのドクター・マーティン・ブーツ、ウェンディーズのスタッデッド・ギアなどが人気商品に。
ヴィヴィアン・ウェストウツのワールズ・エンド、パトリック・ロイドのジョンソンズ、
デイブ・フォーチュンのロボットの靴やスーツを初めとするロンドンの最先端ブランドや、
BOY、ラスト・リゾート(イースト・ロンドンにあった伝説のスキン/Oiパンク・ショップ)の商品も取り扱っていた。
バイク用品店以外で、日本で最初に赤い裏地のサイド・ベルト・レザー・ジャケットも販売。
さらに、ロンドンで取材してきたパンク・ギグのライブ映像と共に、
最新のレコードを流すD.J.イベントなども積極的にを行い、
音楽シーンを通してリアルなロンドンの最先端の流行を紹介していた。

666 History

<http://www.666jp.com/html/newpage.html?code=2>

CANTE GRANDE アメリカ村店

1985年、ロンコート2Fにオープンしたエスニック・カフェ。
80年代前半のエスニック・ブームの盛り上がりを受けて、
中津本店のカフェがアメリカ村にも進出。
ロンドンでのエスニックのニュー・ウェーブ化に伴い、
ヒッピー臭くなくおしゃれになってカフェの形になったといえる。
エスニックなら、音楽はラングーン(キングコングの5F)で、
お茶はカンテというくらい、エスニックのおしゃれスポットだった。
(1988年12月、アメリカ村店閉店の後、「モンスーンTea Room」に)
★BGMイメージ
1882年のロンドンから流行ったシーラ・チャンドラのモンスーン、マーチン・デニー、ウォーター・メロンなど。

プレイガイドジャーナル

「日本で最初の情報誌」と言われ、70～80年代の関西のサブカルチャーに
大きな影響を与えた1971年創刊の情報誌。
1975年～1980年、西清水町の江川直ビルに事務所があった。
この頃の編集長(第三代)は山口由美子で、B6判。
後に劇団黒テントとなる演劇センター68/70の「翼を燃やす天使たちの舞踏」大阪上演実行委員会の
メンバー(村元武、山口由美子ら)が母体となったため、
創刊時のメンバーには舞台関係の人物が多かった。
初期には本屋にはあまり置かれず、ライブハウスや喫茶店などに編集者たちが直接、配本していた。
当時は珍しかった雑誌での「喫茶店特集」が好評だったため、単行本「青春街図」がシリーズ化。
ぴあMAPの走りのようなもの。
山口由美子が企画した、いしいひさいちの漫画単行本「バイトくん」はベストセラーに(1977年)。
音楽ライブ、演劇公演、映画上映、フリーマーケット、海外ツアーなどのイベントを、
誌面とも連動しながら盛んに行った。

フリーマーケット社

フリーマーケットを関西で企業化した功労社。
1983年のなんばCity屋上でのフリーマーケットには、数万人の来場者を数え、
人を集めるノーハウを元に、後に様々な事業展開をしている。
1985年8月からは、アメリカ村で『WEEKEND MARKET』を定期的に関催。

桑名晴子withベーカーズショップや大塚まさじのマネージャーを勤めていた西村源一郎も在籍。

ホテル日航大阪

1982年オープン。「御堂筋を西に渡るのは不良」と言われていたのが、このホテルができて、アメリカ村へと渡る人が激増。地下にあったビストロ・ヴァンサンクのカレー屋さんには、安藤忠雄がよくやって来た。

清水湯

早朝から深夜まで開いている銭湯。
1984年に火事になり休業、1987年にリニューアル・オープン。
ミュージシャンよりも芸人さん率高し。露の五郎さん、中田カウスさんが有名。

ホテルカリフォルニア

ステーキで有名なレストランチェーン『シャロン』が経営するホテル。
1984年に大宝寺町で54室オープン。
アメリカ村の名前に乗っかってオープンしたが…。

VAN本社

VANの生誕地。1951～1962年はヴァンチャケット本社。
その後、本社は東京に移転し、大阪支社となった。

【周防町南側】

Palms

ループの後、1978年に日限萬里子がオープンした地下のディスコ(1984年閉店)。
1979年の年末には、ビル全体をパームスとして、地下のディスコ以外に、1階カフェ、2階バー、そして3Fにはボディソニックのスペースを設けた。
その名のとおり、トロピカルムード溢れたパーム・ツリーが生い茂り、高くとった天井と窓が大きく開いたユニークな空間が人気を集めた。
とにかくおしゃれ好きが集まるお店だったが、サーファーなどの遊び人から、次第に市民権を得てきたモデルやスタイリストなどの業界人、そして「カラス族」という名を生み出したDCブランド全盛期ならではの、マヌカンやマヌ男(DCブランドショップの店員)に客層が時代とともに変化していった。
カフェのテーブルには、足踏みミシンが使用され、テーブルサッカーもあった。
そして、当時は珍しいビデオプロジェクターも装備。
イーグルス/Hotel Californiaがよく流れていた。
地下のディスコは1980年にリニューアルされ、音楽で言えばニュー・ウェーブ、オルタナティブ路線に突っ走る。
現在のクラブという概念を日本で開花させたのはこのパームス。
このパームスから数々の有名DJを輩出したが、京都のカリスマ、EP-4の佐藤 薫や、天宮志狼がその代表格。
カフェには、イベントやプロモーターが「大阪ならパームス！」とばかりに、海外のアーティストをよく連れてきた。
クラフトワーク、ジョン・ライドン(PiL)、ジョー・ストラマー(クラッシュ)、スージー&ザ・バンシーズ、など。
日本のミュージシャンでは、桑名正博やもんたよしのりが常連客。
また、あのウォーキング・ドクター、デューク更家も働いていた。
★クラブの選曲
スロッピング・グリッスル/

ジョイ・ディヴィジョン/
ホワイトハウス/
D.A.F./Der Mussolini
パンク
エコー&ザ・バニーメン/The Cutter、ピート・シエリー/Telephone Operator
PiL/flowers of romance”
トーキング・ヘッズ/
バウハウス/、パティ・スミス/Because The Night

KINGKONG

1979年にオープンした大阪初の中古レコード店。
同じビル内にワールド・ミュージックや日本のインディーズものなどの専門店を何店もオープン。
ワールド・ミュージック専門店「ラングーン」(1984年、後のガーデン)には、ビル・ラズウェルが来店、
アジアンポップスのカセットを買っていった。
S.O.BのNAOTOが店長を務めたスラッシュ&スケボー専門店「ヴァイオレント・グラインド」(1984年オープン)
には、ビル・ラズウェルと一緒にきたジョン・ゾーンが、息子さんがファンとのことでNAOTOにサインをねだった。
1988年にオープンしたインディーズ専門店「Giga」は、キングコングで扱っていたインディーズものが
軌道に乗り、専門店として独立。
ラフィンノーズは、メンバー自ら納品書を持ってレコードを置いていき、
ボアダムスの山塚アイのテープはすべて取り扱うなど、大阪インディーズ界のメッカとなった。
その他に、アメリカ買付専門店の「キングコングUSA」もある。
1987年には、扇町ミュージアムスクエアで元アーク・サリーのPHEWのコンサートを開催。
ソウル・フラワー・ユニオンの中川敬はバイトしていた時、
店にメディアの取材が来ると、「ミュージシャンとして有名になりたい」ので、
お店の取材のカメラには写らないようにしていた。

POINT AFTER

1978年オープンのディスコ(～1983年)。
サーファーものやブラック、AORといった大阪ミナミらしいディスコ・テイストの他に、
ソフト・ロックやレゲエなどオール・ジャンルの選曲が、ジジックやマハラジャとは一線を画していた。
スタッフでは、ラーク&ケント兄弟が有名。
独特なDJトークのスタイルは、ケントから全国に広がり、
その後、ジジックやマハラジャでもメインDJを務めた。
ラークは昭和天皇にフレンチを作った経験もあり、
後に四ツ橋で「鈴屋」という創作和食料理で有名になったカリスマ料理人。
★選曲イメージ
ピーター・フランプトン/Show Me The Way(live)
ボブ・マーリー&ザ・ウェイラーズ/I Shot the Sheriff
ピーター・トッシュ/Get Up, Stand Up
桑名正博/夜の海
ローリング・ストーンズ/Satisfaction
ザ・クルセイダース/Spiral

NEST SALOON

ブルースが似合うアメリカン・バー。ライブもよくやっていた。
桑名正博・晴子兄妹など大阪らしいアーティストがライブだけでなく、よく呑んでいた店。
ポイント・アフターの梅ちゃんが経営していた。
ウッディーな内装は、サーファー・ブーム時代のアメリカ村の名残。
マリアテレサの平井康祐はよく人を連れてきて呑んだくれ、
月に100万単位で散財していた。

BAHAMA

1963年オープンの老舗ライブハウス。
ハードロック・ヘヴィメタルのメッカとして知られたが、
1979年頃はパンクのINUやアージェント・サリーも出演。
INUの町田町蔵は現在、芥川賞作家の町田康。
過去のレギュラーバンド:アースシェイカー、44マグナム、マリノ、SHAZNA、すかんち、他

SUN BOWL

アメリカ村ユニオンによる「アート・アート'83」の開催後、
地下ではブラジルのアーティスト、ジョイスのコンサートも行なわれた。
<http://magicalart.jp/2009/12/10/652/>
サンボウル地下は後にクラブ『SUN HALL』となり、現在はライブハウスに。

STUDIO D'ARTISAN

1979年、アンクルサムの2Fにオープンしたフレンチ・インポートのブティック。
ミシン・メーカーと言われるパリの小さなメーカーの最先端の服が並んでいた。
クリーニングに出すと、信じられないくらい小さくなって、
しょうがないので額に飾ったという人もいほどアーティストックなブティック。
オーナーの田垣繁晴はかつて、パリでピエール・カルダンとカステル・バジャックの元、デザイナーを務める。
スタジオ・ダルチザンという店名には「職人工房」というジーンズ作りへの熱い思いがこめられ、
日本でも本格的なデニムを作るビンテージメーカーとしては草分け的な存在のブランド。
当時は2万円代後半と言う価格だったが、じわじわと全国に染み渡る様に売れて行く。
ビンテージジーンズ界で「OSAKA 5」と言われる5人の一人。
<田垣繁晴(1982年 スタジオ・ダルチザン)、林 芳通(1988年 ドウニーム)、山根英彦(1991年 エビス)、
辻田道明(1992年 フルカウント)、塩谷兄弟(1995年 ウエアハウス)>
後に「マリジュアン」(東心斎橋)やシピーの専門店も経営。
店舗には業務用のエスプレッソマシンもあって、フランスの最新情報を聞きながらお茶もいただいた。

NOUNOUCHE

ダルチザンと並ぶフレンチ・インポートのセレクトショップ。
ダルチザンはとんがっているが、ヌヌシュは高級感でと、客層は分かれていた。
後に代官山にも出店。元祖ストーンウォッシュレザーのシャルル・シェビニオンの商品が有名。

気分屋雑貨店

1984年に道頓堀のマリアテレサがオープンした雑貨店。
アーミーやグラム、パンクなど、ぶっ飛びの最先端ファッションを扱い、
セレクトショップの走りとして有名だったマリアテレサらしく、新感覚の雑貨であふれていた。
ロゴは、セゾンの堤 清二の懐刀と言われたマーケッターの今井俊博がアドバイス。
オーナーの平井康祐は、オリジナルブランドのマリアテレサクラブを立ち上げるとともに、
アパレルメーカー団体「大阪マンションメーカーユニオン」を結成し、
マンションメーカー界の活性化に尽力した。

DEP'T

キタの神山町で古着のメッカとして有名だったデプトが1985年、サンボウル地下にミナミ店をオープン。
カセットマガジンの「TRA」とコラボレーションしてライブ「デプトラ」を開催する。
ショコラータやメロン、ミュート・ビート、ワールド・フェイマス・マイド・ボーイズのライブは、
アメリカ村に東京のおしゃれ感を持ち込んだ。
※TRA: 式田純が1982年、伊島薫とミック板谷とともに刊行。

FAYRAY

キングコングがビルの1Fで1983年にオープンしたアートスペース(～1984年)。
澁谷守ディレクションにより、既存のギャラリーにはない若手アーティストの展覧会やビデオ上映会などを行なう。

スクリーミング・マッド・ジョージ展覧会(SFXアート)、
ドクメンタ・ビデオショー(ドイツでのコンテンポラリー・アートのオリンピック紹介)、
ナム・ジュン・パイク・ビデオ展、ドイツ表現主義映画上映会、など。
1983年、サンボウル地下で若手アーティストの総合芸術祭「アート・アート '83」を開催。
絵画、写真、ビデオ、音楽、パフォーマンスなど、新感覚のアートがあふれた。
※出品者の萩原敏訓は後に、日本グラフィック展大賞受賞、
佐野元春「ナポレオンフィッシュと泳ぐ日」のジャケットにイラストが採用される(1989年)。
1984年の「アメリカ村カーニバル」(三角公園)に、全体のプラン作成とアートイベントの企画制作で参加(アメリカ村・ユニークタウン宣言によるイベント)。

壁画

1983年9月に黒田征太郎がペインティングした「PEACE ON EARTH」。
アメリカ村の新しいシンボルマークになった。
大阪の音楽業界一有名なプロデューサー、阿部登が現場を仕切り、
藤井裕(THE VOICE&RHYTHMのベーシスト)が現場監督を務め、
デザイン事務所K2のメンバーも東京から来阪。
誰がカバやねんロックンロールショーのDonメグ(ベース)も最終日に駆けつけた。
スタッフの日当は1日1万円。雨の日は、宗右衛門町の田舎そばでどんちゃん騒ぎと
毎日が宴会のようなペインティングだった。

三角公園

正式には「御津公園」。北堀江通と周防町筋の食い違いを矯正するために、
明治以降に斜行道路が通されて三角形のスペースが生まれ、戦時中は防火水槽や飯場が設置されていた。
戦後に児童公園となった後、周辺のまちの雰囲気に合わせて改修され、現在のデザインに。
ミュージシャンやアーティストなど若者のパフォーマンスイベントが催されるなど、
大阪一有名な街区公園。
1980年、AORのソングライター、ディック・セント・ニクラウスが関西限定発売でヒットした「Magic」のお礼 &
プロモーションで来阪。三角公園で植樹祭を行なった。
1984年のアメリカ村カーニバルで行なわれたファンション・コンテストに、
三代目魚武濱田成夫が参加。しかし、できすぎているファッションのため、2位に。
優勝は新聞紙で身体をくるんだアナーキーな男性に奪われた。
その後、ディスコでパリのエスモード学院長にスカウトされ、1984年年渡仏。
パリでファッションショーを開催することになる。

タベルナキータ

1983年11月、シェ・ワダの近くにオープンしたイタリアン・レストラン。
ランチはグラスワイン、パスタ、サラダ、コーヒーで600円！
この頃はまだ雑誌でイタリアンのお店は紹介されてはいなかった。

ルーミング心斎橋

コンドミニアムタイプで、ミニキッチンがついたレンタル・マンション。
何人泊まっても2ベッド+エクストラ2ベッドで10,000円。
1986年前後のマハラジャなどミナミのディスコ全盛期、
遊び人たちはみんなでルームシェアして泊まっていた定番ホテル。

アングルサムビル

ダルチザンとマーキースポーツクラブ、スタジオ・アンクルサム(アップル・スタジオ)のあったビル。
マーキーはこのビルからミニFMをオンエア。
階上のスタジオは、有名無名ミュージシャン多数集まる貸しスタジオ。

メアリー・ポピンズ

現在のイタリアン・ブームの遥か前から営業していた、古風で上品なイタリアン・レストラン。
貝の皿で出されるグラタンが人気。

●エルロデオ

●天牛書店
